

令和6年度 園評価書

園番号 35 園名 入山こども園

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A：よくできている B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
心豊かで 思いやりのある 子	自分の思いも、 友達にできる子 ～「ねえ、みて！ てきてい！」 「それ いい ね」～	自然物や生き物に触れて興味関心を持ち、試行錯誤しながら遊びを楽しんでいる	季節ごとに入山の自然物に親しんできた。秋から冬にかけては松ぼっくりや木の枝、どんぐりを使った装飾。どんぐり転がし、枯葉のプール、水づくりや霜柱など、この時期にしかできない遊びに親しんだ。又、目の前のことだけでなく風に揺られた木々の動きから風を感じたり、石ころの川原を歩くことで体感を鍛えたり、水の流れを感じたりと自然を活用し五感を刺激した遊びが十分にできた。試行錯誤しながら、草花をすりおろして色水遊びをしながら色が濃くなり薄くなったたりする様子に不思議さを感じていたが、まだまだその機会が少なかったと感じる。	B	B	・11月の時に比べて子ども達の人見知りも減り前の時より元気に活動している	・園外に散歩に出掛ける機会を増やし、季節の移り変わりや変化・音・色に目が向けられるような声掛けをしていく ・関わるばかりでなく時にはそっと見守り、先導しすぎず子ども主体の活動を心掛ける
		人と共に過ごす心地よさを感じ、「それいいね」と相手の良さに気づいたり思いを通じ合ったりしている	保育教諭がこどもの姿や行動したことにに対し肯定的な言葉かけをするようにしたり、具体的に相手の良さを伝えるようにしてきた。子ども達も友達と一緒に遊ぶことが楽しいと感じられるようになり、乳児も保育教諭が介入しなくても一定時間は、子ども同士の遊びが長続きするようになってきている。幼児も友達の性格や得意なこと苦手なことも十分理解し相手を思いやる姿も見られるようになってきている。	A	A	・元氣よく挨拶をして出迎えてくれて成長を感じた	・子どもの良さを認めたり伝えることを大事にしながら「こんな時はどうすればよいか」の場面を意図的に作ったりして考え合っていく ・豊かな感動体験を子どもと一緒にしていく
		人、もの、ことに興味を持って関わり満足するまで十分遊び込んでいる	乳児組は子どもたち一人一人が集中して十分遊ぶようにバーテーションを使ってじっくり遊ぶ空間づくりをしている。又、子どもたちが好きな感動遊びはいつでも遊ぶように用意してある。幼児組は興味を持った遊びは十分に繰り返し遊ぶことを楽しんでいるが、ものやことへの興味をもっと深めていくためには保育教諭の関わりや環境設定において足りないことがあった。	B	B	・子ども達の発達に合わせて遊びのグッズが用意されていたが、手作りのものも多くよいと思った	・引き続き否定的な言葉がけや表現は避けポジティブな話し方を工夫していく

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	遊びや生活を通して、個々の子どもにどんな力が育っていてどんな力を育てたいのか援助（環境と関り）ができている	毎日の振り返りや会議で子どもの姿や遊びの様子を報告し環境と関わりについて話し合いを行ってきた。その中で困っている姿や課題のほうが表立ちどんな力が育っているかは後になりがちだった。話し合いの中から翌日の予想される環境について関われるような設定をする配慮ができた。	B	B	・不審者訓練について110番通報をしてどのくらいで出勤・到着するのか？園も学校もしたことがないのならやってみると良い。いつでも相談できるよう交番と密接になっていくと良い	・各歳児において「就学までに育てほしい10の姿」を見据えて「今育てきている子どもの姿」をとらえ指導計画を立て実施していく ・子どもの振り返りが次の保育に活かされるようにする
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	家庭生活や在園時間・発達過程を踏まえ、安定した気持ちで園生活が送れるように配慮している	早番から遅番、通常保育の連続した生活の流れの中で日々子どもの生活リズムや健康状況を把握し一人一人の発達に応じた保育を行っている。又、保護者と離れて不安定な思いや友達とのトラブルによる不満な気持ちも切り替えができるような場所と保育教諭による関わりを大切にしている。絵本コーナーも子どもたちがホッとできる場所であるため、手に取りやすいように整理整頓した時期にあった絵本を紹介している。	A	A	・避難訓練について年12回となっているが毎月続けていく意識は高いと思う。小学校と合同避難訓練をしていなかったが一緒にできればと思う	・長時間保育や年齢に合わせて早番遅番保育の玩具を入れ替えて環境設定をしていく
	(3)環境を通して行う教育及び保育	経験した行事や事を通し、遊びの中に取り入れられ、遊びが継続されていくように環境構成ができていく	行事や経験した出来事が終わってからではなく早めに準備をすることで遊びが継続されるようになってきている。ただ乳児クラスと幼児クラスの連携が細かなところまで行き届いていないことがあった。その日終わらずに形にしていける楽しさを感じられるようになってきている。	B	B		・今何を楽しんでいるかを見る、知ることを大切にして遊びが盛り上がるような環境構成をしていく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	様々な災害を想定した訓練に真剣に取り組む、安全意識を高めている（火災、地震、洪水、土砂災害、不審者訓練）	・年間12回の避難訓練、6回の不審者訓練を行い職員や子どもたちの中に危機管理や安全意識を高めている。年間計画に沿って行うだけでなく、実際に起きた時の想定や迷ったこと、おかしいと感じることなど様々な疑問を出し合い翌月に生かしている。県防災ハザードマップを利用しながら散歩先の危険箇所を把握している ・ヒヤリハットに基づき同じヒヤリを繰り返さないように職員が共有している。又、危機管理担当職員がヒヤリハットの統計を取り時間・場所・傾向についてまとめ職員全員が周知している。	B	A	・ヒヤリハットについて“すべり台を後ろ向きに滑っている”と言う事例に対して。あまり手を差し伸べすぎるといざという時危険なことを避けるスキルが育たなくなってしまう、意外なところでは怪我をしてしまう。この事例のように滑る時にはしっかり手で握って滑るということを教えて傍で見守りいざという時に、手を差し伸べるという形でいいと思う	・避難訓練の取り組み方の検討(想定の見直し) ・ヒヤリハットに挙げるかどうか悩んだ時も小さなことも言葉にして共有していく
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	基本的生活習慣が身につくように家庭と連携を取りながら個々に合った援助ができていく	送迎時のコミュニケーションや連絡帳を通し家庭との連携を取り合いながら援助を進めている。トイレトレーニングや着脱は楽しくできる様に歌を歌ったり、絵本で学んだりトイレにシールを張る場所を作るなどして自分から進んで行けるような工夫をした。手洗いうがい、うがいしやすい水道を利用することで習慣化されている。幼児組もハンカチを持つてくという意識が芽生え「今日忘れなかったよ」と自分からアピールしている姿が見受けられる。	B	A		・家庭で実施されなくなってきた季節の行事も引き続き、絵本を通して伝承していく ・基本的生活習慣は子どもだけでなく保護者にも伝わるように送迎時やクラスだよりに入れていくようにする
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	一人一人が自己肯定感を持ち、生き生きと遊び生活できるように、発達や特性に合わせた支援をしている	子どもたちが成長していく中で新たな特性が現れ、以前と同じ支援では通用しないことも出てくる。その度に研修で学んだことや講師に質問するなどしてステップアップした支援を行うように心掛けている。また成功例はクラス担任以外の職員同士が共有し、全員が同じ関わり方ができるようにしている。	B	A	・S型サービスは来年度に小学校も企画しているので一緒に計画できればいいと思う	・安心して活動に入ることが出来るように事前に写真を撮っておき、その写真を見せっていくようにする
5 組織運営	(1)組織体制の充実	全職員が各自の役割について、組織で運営していることを理解し、協力体制で取り組んでいる	担当分掌に早目に取り組むことで仕事分担ができ、他の職員にも協力してもらうことができる。遅滞しているときは「どうなっているか」進捗状況を聞いて、担当者以外の職員に仕事を下すなどの配慮をする中で協力体制をとっている。	B	B	・幼児組は劇遊びの中でカレーを協力して作っている姿をみた。友達同士で一緒に作り上げるということが意識の中に入っていて楽しんでいる様子が分かる。また、乳児は劇遊びの中の大きなパズ抜きごっこで先生が間に入りながら友達と協力する姿がある。一方で、自分のしたいお絵描きを紙いっぱい書き夢中になって遊んでいる姿が見られる。一人一人の遊びが保護されているととても良い環境だと感じた。	・様々な行事は各自事前に目を通し、準備リストを基にゆとりを持って準備出来るようにしておく
6 研 修	(1)研修体制の充実	研修テーマ「やってみたいがつながる援助」の手立ての実践が行われ子ども理解を深めている	・入山の自然を遊び環境に取り入れるために、職員が自然について知る為に元環境教育研究会職員による研修に参加し自然物を利用した遊び方を学んだ。 ・「やってみたいがつながる援助」の手立ての実践の中で子どもが「やってみたい」と思っていることを実現できるように日誌で子どもの思いを再確認したり遊びの見取りとつながりを職員間で話し合い子ども理解を深めていくようにした	B	A		・マップの活用方法・子どもと見た時に、「出掛けたところ」を話題にしていき子どもと共有していく。また、張り出す場所も玄関に移動し保護者もいつでも見られるようにする
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	遊びだしのきっかけとなる体験や環境を工夫し、子どもが「やってみたい」に繋がる援助や環境ができていく	視覚的に環境を整えたことで子どもたち自らのやってみたいにつながる援助ができていく。またちょっとした変化によっても子どもたちがその変化に気づき「おもしろい」を持続していた。折り紙を折る際にも折り方手順表を用意することで子どもが、自ら考えて折ろうとする姿が見られた。	B	A		・前日の遊びの姿から、翌日の予想される遊びの姿を予想し園庭環境を整えていく ・季節ごとの遊び環境図を作成し園全体の職員で共有する
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	保護者の子育てに関する不安を理解し、子どもの成長を共に喜び子育ての楽しさの共有ができていく	・園だより・クラスだより、ドキュメンテーション、連絡帳、送迎時のコミュニケーション、参加会などで園での子どもの姿を見て頂いたり話したりすることで子育ての楽しさ、不安なことと一緒に考えるようにしている ・保護者参加の行事ごとにアンケートを集計し成果と課題をまとめ来年度に活かす準備ができていく	B	B		・ドキュメンテーションでは、「就学までに育てほしい10の姿」を意識しながら、ねらいや子どもの姿、育ち、気付きなどを発信していく
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	近隣園・小中学校との連携を図り、交流や情報交換を進めている	・由比地区3ヶ園(入山・由比中央・由比)の交流や個別の交流を通して情報交換を進めるとともに子ども達が多人数の中に慣れていくことも考慮しながら進めてきたが年3回の計画だけでなくもっと自由に交流できる機会を増やしていく必要があると感じる ・園小中一貫コミュニケーションスクール(由比結学)に参加し職員同士の情報交流に務めるとともに、0歳から15歳までの教育・保育を考える学びの場となっている。更に小学生の力を借りて子どもたちが成長できることを考えていきたい。	A	A		
10地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	豊かな体験が得られるよう、地域の様々な人とのかわりの機会を大切にしている	・園だよりを地域に配布し、地域の皆様の避難訓練の協力を仰いだが難しかった様子。園だよりを元に違った形で発信していきたい。 ・園で栽培した野菜を使いカレークッキングをし地域の方をご招待した。又、敬老会・八幡祭りに参加することで入山地域の方と共に交流を楽しんだ ・S型サービスへの訪問することで、いろんな方と触れ合い親しみをもち人と関わる事の楽しさや役に立つ喜びが感じられた。近隣の豊かな社会資源を利用したり入山・由比の街をもっと知ること地元愛につなげた。	B	A		・今年の取り組みを来年度はもっと増やしていき地域の様々な人と接する機会を増やしていく